令和５年度大学・附属学校園連携事業推進経費　成果報告書

所属名	多文化教育系・附属高等学校平野校舎
研究課題名	「即興型英語ディベートの授業導入と高大連携の可能性」
研究課題概要	**【目的・概要】** 令和4年度より実施された高等学校学習指導要領（外国語）では、「即興性を意識した言語活動、意見を述べ合うなどの言語活動が適切に行われていない」等、現在の外国語教育の課題があげられ、今後の目標として「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を伸ばす」等が掲げられている。 本研究では、附属高等学校平野校舎の英語の授業において、ディベートの手法を活用した授業を年間10回組み入れ、大学、高校、外部講師の協働によりカリキュラムの編成や教材開発、教育効果の検証等を行った。授業は、高校2年生全員（3クラス）を対象にクラスごとに行い、英語力によって分けた8人の班が50分で一つのテーマについて英語でディベートを行うものであり、今回は特に①「各授業で議論するテーマの設定」②「生徒に活用させる教材」③「評価方法」④「授業を通した生徒の変容の自己評価」について検討した。 **【結果】** 本年度の実践では、上記①～④に関する結果等を簡単に示す。 ①「各授業で議論するテーマの設定」 高校生に身近なテーマを前半に、社会問題を含むテーマを後半に設定した。いずれにおいても活発な議論がなされたが、社会問題を含むテーマでは、英語力以外にテーマに関する知識や理解が必要となり、生徒や班によってうまく議論できない場面があった。 ②「生徒が活用する補助教材」 「活用できる表現」や「テーマに関係する語句」などの補助教材を毎時間生徒に提供した。その結果、特に「活用できる表現」に関するニーズが高く、今後、さらに拡充し指導していくことが有効と思われる。なお、本学教員研修留学生からは、ボディランゲージ、トーンなどの効果的なコミュニケーションスキルの指導も必要との指摘があった。 ③「評価方法」 学習指導要領で示された三観点について、それぞれ規準・基準を設定し毎時間評価した。点数の推移は授業ごとの概ね上昇しているが、テーマの難易度により変化することがわかり、活発な議論への準備についての配慮が必要である。 ④「授業を通した生徒の変容の自己評価」 英語を用いた説明や議論に自信を持つ生徒が増える一方、本授業を通して発想力、論理的思考力、要約力、伝達力の伸長を認識する生徒が多かった。
研究課題の構成員（リーダーに※）	加賀田　哲也(以下多文化教育系) 米澤　千昌 赤坂　美佳(以下附属高等学校平野校舎) 内山　美和※ 武部　俊輔 吉川　あい